

学報

秋の文学散歩 (昭和三十七年十月)

若狭の水郷

十月五日、卒業論文の息抜きに私たち四回生は一泊旅行に出た。野の畔を彩る曼珠沙華に目を楽しませ、眼前に拡がる紺碧の日本海に歓声をあげつつ、大阪から三時間余りで目的の「三方五湖」に着いた。旅行者の影もない俗化せぬ素材さが我々を満足させた。久々子湖・日向湖・水月湖・菅湖・三方湖の五湖は、広々として掘割や川で結ばれ、遊覧船で回れる。淡水湖・鹹水湖が入りまじつて様々の養魚が行なわれている。菅湖に生えたひとと薄や、二条院讃岐の「わが袖は潮干に見えぬ沖の石の……」の歌枕沖の石などの話が詩情をそそる。下船した鄙びた棧橋わきの可憐な水草の花が印象的であった。

小浜市内で一泊。食後、先生方を

囲んで楽しい四方山話に、秋の夜更けまで打興じた。翌朝快晴。若狭湾から蘇洞門巡りに出発。海空気が胸一杯に吸つての湾内巡航は快適だったが、日本海は浪が荒かつたので外海は断念して、赤礁遊園地に降り立つて日本海の景観を満喫した。市内の妙玄寺は近世の国語学者東条義門が住した所。港口には小浜城の石垣が見えた。それらは有志で自由に見学した。(四回生・三木昌美記)

嵯峨野

素晴らしい秋晴の十八日、三回生は嵯峨野を巡つた。原田・竹内両先生に学生十数名。まず天龍寺を訪ねた。庭園や襖絵を鑑賞。推理作家水上勉氏が来て、庭を眺めていた。小

説の構想をねつていたのかも知れない。私たちは目引き袖引き観察した。うす暗い藪垣の道を通り野の宮に出る。源氏物語賢木の巻に、野の宮の六条御息所を光源氏が訪れるくだりがあるが、昔はさぞわびしく寂しい所であつただろう。北へ線路を越えるとさつと視界が明るくなり、小倉山の裾が開ける。常寂光寺・落柿舎がある。門口の蓑笠が旅人芭蕉を偲ばせる。小さな自然石に「去来」とのみ刻まれた俳人去来の墓の前に、誰が供えたか赤いリンゴが一つ置かれていた。祇王寺を経て滝口寺で昼食。清涼寺・厭離庵・最後に大覚寺を訪ねた。挿花の本山嵯峨流の家元であつて、活気があり立派だつた。昨夜月見の宴があつたという屋形舟が大沢の池に浮かんでいた。私たちは池畔を巡つて眺めをほしいままにした。素材で優にやさしく、艶にもさびた秋の嵯峨野の風趣を終日味わつた快よい行楽の一日であつた。(三回生・福岡澁子記)

弘川寺

十八日、私たち二回生は葛城山麓に西行の遺跡を訪ねた。安田先生も一緒。近鉄上の太子駅で下車し、田舎道を彩る鈴なりの柿に目を楽しませつつ、孝徳天皇御陵を経て高貴寺につく。安永年間慈雲律師が在住して栄えた由だが、今は訪れる人もなく静かである。高貴寺から山間の小部落を抜けて、西行終焉の地弘川寺についた。予想以上に広く美しくすがすがしかった。裏山に西行の歌碑があつた。「仏には桜の花をたてまつれ我が後の世を人とぶらはば」を佐々木信綱博士が書いている私は「ねがはくは花のもとにて春死なむそのきさらぎの望月の頃」を思い浮かべてしばし感慨にふけつた。

(中平雅子記)

西行を語りてやまぬ老僧に木の間を洩るる秋の陽輝やく

(橋本法子作)

国文学会総会

(昭和三十七年度)

十一月六日午前十時から、本学学内で次のような順次で開催した。

講演

通じる話し方。通じない話し方

徳田ミチ子

研究発表

島崎藤村論

芝西 房美

四季派の抒情誌

戸松夫佐子

徳田さんは本学第一回の卒業生

で、現在NHKの大阪放送劇団に所属されている方、また、かたわら

「話し方教室」を主宰されてもいる

方で、その巧みな話術とゆたやかな内容には、参会者一同、大いに啓発

されるところがあつた。また、研究

発表も、本年度の卒業生の芝西さんと四回生の戸松さんとによつておこなわれ、それぞれに有益であつた。

卒業生の参会者もあり、たのしい一日を過ごすことができた。

昭和三十七年度卒業論文題目

柿本人麿研究

有光美紀子

今昔物語研究

井上智世子

紫式部日記研究

井上 礼子

蜻蛉日記を中心とした

平安日記文学の研究

内田 道子

林美美子論

江戸紀代美

井原西鶴論

江見 紀

与謝野晶子論

尾崎 明美

落窪物語の引歌

大迫 信子

禪と日本芸術

岡本 可子

有島武郎論

金丸三重子

田山花袋論

川上 孝子

小川未明研究	北村 英子	現代文章論	中根千賀子	鷗外の作品とその社会的影響	和田美穂子
徒然草研究	絹谷 範子	横光利一論	中野 裕子		
近松門左衛門の人と作品	小鍛冶三恵	古代日本語の形容詞	西岳千寿子		
国木田独歩研究	小谷 明子	谷崎潤一郎「細雪」と源氏物語	馬上 忠子	大阪樟蔭女子大学第十五回 夏季公開講座	
小林一茶研究	小林 信子	近松の世話浄瑠璃研究	浜崎 博子		
九条武子研究	高津 嘉枝	徒然草研究	浜詰 祥子	右の講座において、国文学関係で は、次のとおり講演があつた。	
泉鏡花の描く女性像	近藤 久子	上田秋成論	原 和子	七月十五日	
武者小路実篤論	阪谷 芳英	有島武郎論	前原 郁子		
岡山県笠岡市の方言	清水 靖子	森鷗外論	松岡 暲子	わが国の長篇物語について	
太宰治論	重村 浩子	堤中納言物語研究	松宮 勝子	七月十九日	
平家物語研究	杉本 登代	夏目漱石「行人」研究	松盛 恵子	「猿蓑」憲羽連句鑑賞	
風雅集研究	田畑瑛千子	万葉集用字法の研究	三木 昌美		
芭蕉と蕪村との表現の比較	谷口 典子	吉井勇論	三鼓 嬉子		
堀辰雄研究	都築 和子	室生犀星論	美田 明子	七月二十日	
漱石文学における女性像	寺井 保恵	上田秋成論	南 照子		
永井荷風論	寺戸 立子	児童文学の歴史的展開及びその 文学性	宮本寿嘉子	源氏物語の人間像について	
散文詩試論―富永太郎の世界―	戸松夫佐子	井原西鶴論	山崎 邦子		
森鷗外論	中西美砂子	芭蕉研究	山下 紀子		
		立原道造論	吉田 玲子		